

# 四万十川物語

〈送信者〉  
財団法人 四万十川財団  
TEL : 0880-29-0200  
FAX : 0880-29-0201  
E-mail: office@shimanto.or.jp  
URL: http://www.shimanto.or.jp

## 川が昔ながらの川であるために！ “よみがえれ 四万十源流 の会”

清流通信読者の皆様こんにちは。 今月は、四万十川源流域の、梶原町・津野町からの話題です。

### 川の地図『四万十源流 自然と歴史マップ』

ここに、四万十川源流域の一枚の地図がある。これが普通の地図と違うのは、四万十川の支流北川のあちこちに地名が記されていること。“きらら淵”“蛇ヶ淵”“馬渡瀬”…等々、そこに伝わる物語が想像される、そしてどこか懐かしいひびき。これはどうやら川の瀬や淵につけられた名前らしい。自然の驚異と向き合いながら川と共に生きてきた人々が、そこに伝わる伝説と共にそう呼び習わしていたその名前だ。この“川の地図”『四万十源流自然と歴史マップ』を作ったのは、津野町・梶原町をフィールドとして活動する『よみがえれ 四万十源流 の会』だ。

### よみがえれ 四万十源流 の会

1973～79年、四万十川第二支流北川では、公共用地の確保で河川の付け替えを行い、下流での氾濫防止のためにコンクリート擁壁工事が行われた。しかし、その工事で4mを越す落差が生じたために、一部の魚が遡上できなくなった。そこで住民たちは、魚が自由に川を上下できる河川環境に戻すため、県に工事の手直しを要望した。そして、自然に近い川に復元する、“近自然河川工法”が取り入れられた再工事の結果、魚が遡上できる河川にやっと戻った、という経緯があった。1996年のことだ。

そのような活動の中から、河川の自然再生の必要性を痛感した有志が中心となり、各分野専門家の参加を得て、2004年5月、四万十川源流域のある東津野村（現津野町）で、四万十川源流域の山と川の自然再生を考える『よみがえれ 四万十源流 の会』が誕生した。現在50名ほどの会員で組織されるこの会は、『四万十川を中心とする流域の自然環境の再生を図るための研究・啓発、および地域資源の発見・発掘、環境学習に関する活動』をし、『これらを通じて地域の元気の発現に寄与すること』を目的として、自然・歴史・文化などの調査を中心に活動している。

### 四万十源流域の環境の象徴 = 津野山アメゴ（アマゴ）

夏場でも水温 15℃前後の川の源流・上流域に生息する、日本特産の渓流魚アマゴ。本来のその生息域は、神奈川県西部以西太平洋側、四国全域と九州の一部であったようだ。が、近年、安易な放流等により生息地分布が崩れてきているという。四国山脈の山々を源流点とする、四万十川・北川・梶原川などには、それぞれ固有のアマゴ（地域呼称：アメゴ）が生息する。しかしここでも昭和46年から始まった養殖魚の放流による交雑が進み、また本来四国には生息しないはずのイワナが密放流により自然増殖し、それがアマゴ・アユなどの地元魚類を食害し、種の保全をも脅かしているという。

『よみがえれ 四万十源流 の会』では、津野町・梶原町の四万十川源流域の谷川で、アマゴと渓流魚類及び河川環境の調査をしている。調査を担当した高知大学理学部 町田吉彦教授は、「地物のアマゴ（仮称：津野山アメゴ）は日本に生息するアマゴの中でも、きわめて貴重な遺伝子を保有する津野山在来の種であり、まさに、四万十川源流域における“環境の象徴”と評価する。アマゴをはじめ源流域で自然産卵する魚類にとっては、産卵環境を守ることが魚族の保護に欠かせない」と考えるこの会では、産卵条件に必要な砂や小石が蓄積する河川を守り、餌場と棲処の確保のために、水流・水深の変化や河川素材・岸辺の多様性を守ることなど、生息環境保全の活動をしている。

### 自然の恵みの発見とその恵みを慈しむこと

『よみがえれ 四万十源流 の会』では、この春、環境副読本“四万十川源流域の人と自然”を発行した。これは、独立行政法人環境再生保全機構地球環境基金の助成を受け作成されたもので、源流域の魚類・昆虫・野鳥・植物・川の民話などについて、11冊の小冊子にわけ、こども達にもわかりやすく編集されている。『川や森に一步足を踏み入ると、その不思議さや魅力に気付く。その中で生きものに触れ、決して人間だけでは作りだせない“自然の偉大さ、命の尊さ・美しさ”を感じて欲しい。そして、そんな環境の中で、人間も生かされているのだと感じて欲しい。』この本には、次の世代を担うこども達にむけた、そんなメッセージが込められている。

昔から、静かな四万十川は、こども達が魚捕りや川遊びをする場であった。また、大雨の時には濁流をごうごうと下流に流し、その豊かな水は田畑を潤し、台地に恵を与え続けてきた。そしてそこには川本来の姿があり、川と共に暮らす人々が居た。しかし今、そういう川本来の有様が、少しずつだが失われつつある。けれども遠くないいつの日にか、四万十川源流域にも“昔ながらの川”がよみがえることを、彼らと共に、この会の名前に込められた想いのように、強く願わずにはいられない。



4月中旬『よみがえれ四万十源流の会』の総会（於：天狗荘）



■ パーマークと呼ばれる斑紋が6個から8個で、幅が広く、長楕円形でなく円形に近く、小斑はない。  
■ 黒点や朱点が太めで数も少ない。朱点は側線から下にはない場合が多い。  
■ ほこんの鱗は黄色み、尾鰭の上下には赤く線が入る。尻鰭や腹鰭の下に白く線が入る場合がある。  
■ 背中や腹部にはパーマークの小斑はないので全体にシンプルではっきりした模様である。  
■ 放流アマゴより目が大きい。



環境副読本『四万十川源流域の人と自然』